

社会福祉施設が創り出すネットワーク構築の試み ～京都市西院老人デイサービスセンター「おいでやす食堂」の分析から～

南 多恵子
河 本 歩 美¹
田 端 重 樹²

I. はじめに

子ども食堂が全国に広まりを見せ始めて数年が経つ。子ども食堂に関する全国調査としては、朝日新聞記事（2016年7月2日）があるが、そのときは「5月末段階で、少なくとも319か所」とされている。それが、「こども食堂安心・安全向上委員会」が2018年に調べたところ、2,286か所にも増えたという³。実に、2年で7倍以上に増えるというスピードだ。湯浅(2018)によれば、この数は、“小学校の10分の1、児童館の半分”だという。つまり、2,200か所という数字の“規模感”を見ると、全国に約2万ある小学校の10分の1、約1万ある中学校の5分の1、約4,000ある児童館の半分、となる⁴。子ども食堂は、特別な人が行く特別な社会資源というものでなく、社会のインフラとしての存在感を示しつつある。

その実態は、数名の子どもが集まる小規模なものから、100名～200名が集う大規模なものまで、そして、特別な支援を要する子どもを対象としたものから、多世代交流を目的とするインクルーシブなものまで多岐に渡る。開催曜日や時間帯、頻度も主催団体によってまちまちだ。食堂数は地域差があり、先の調査によれば、東京都は335か所、大阪は219か所、神奈川が167か所と上位3県は大都市を抱える地域であり、青森が3か所、徳島、長崎の7か所とまだ少数の地域もみられる。しかし、今は急速に開設数が伸びる子ども食堂のいわばブームと言ってもよいほどで、これからも子どもをキーワードにした居場所作りは広がっていくとみられる⁵。

西郷(2016)も、「子ども食堂」は時代感覚に優れていると指摘する。楽しいなネーミングで明るいイメージがあり、特別な人でなくても誰もが利用でき、誰でもが実施できる感じで、かつ「食事」という温か

く、皆が集まりやすい、ホッとでき、心を許し合える素材を使っていることなどが挙げられる。その裏で活動の焦点は、子どもとその家庭の貧困問題や生活課題への支援にあたっている。これは、見事な見せ方、見事な仕組み、見事な巻き込み方であるからこそ、日本中で反響を呼んでいると述べている⁶。社会のインフラとして認知されつつある子ども食堂が、やがてどの地域にも当たり前にある時代が近い将来やってくるのかもしれない。その時、子ども食堂はどのように進化、発展し、地域の中でどのような機能を果たすのだろうか。

本稿で登場する「おいでやす食堂」とは、2,286か所の子ども食堂の1つである。2016年12月にスタートして1年半を過ぎ、現在では毎回、100～150名が参加する活気ある「場」となっている。ただし、当初からここまでの賑わいがあったわけではなく、徐々に参加者が増えていき、今では参加者数も安定してきている。活動期間はまだ短いものの、取り組みを継続することで、食堂が生み出す表情も変化を続けている。月に1度、参加者にとって気軽に外食ができる機会となり、多世代が1つの空間に集い共に過ごす場であり、大人と子どもが遊びを通じて繋がりあえる時間であり、学生をはじめ多数のボランティアが持ち味を発揮し活躍できるチャンスにもなっている。更には、地域のネットワーク拠点になりゆく様相も現れてきたのではないかとも思われる。おいでやす食堂には、実に多くの関係者が参画し、緩やかな繋がりを維持する中で成立している。多様な人たちの情報交差点ともいえるべき現象がみられるようになってきている。おいでやす食堂をスタートした頃の食堂イメージをいい意味で覆す過程を辿っており興味深い。

そこで、急速に豊かな表情を醸成してきたおいでやす食堂を事例として、子ども食堂がもたらす機能や役

割を整理していく。とりわけ、広がってきたネットワークの有り様を取り上げ、なぜ、このような機能が生まれ成長してきたのかを分析していく。子ども食堂を単に食事を介する一過性のイベントとするのではなく、社会的な意味合いや信頼ある地域のインフラとして根付くために必要な要素を見出す一助とするために、食堂関係者と共に追究していく。

II. おいでやす食堂の発展経緯について

1. おいでやす食堂とは

まず、おいでやす食堂の概要を押さえておく。以下、南ら（2017）がまとめた「地域共生を目指す居場所づくりに関する研究～京都市西院老人デイサービスセンター「おいでやす食堂」の軌跡から～」⁷から大幅に引用する。

おいでやす食堂とは、京都市右京区にある「京都市西院老人デイサービスセンター（以下、西院デイ）」が地域貢献の一環として取り組む事業の名称である。西院デイは「高齢者福祉施設「西院」と称する事業所の機能の1つで、地域包括支援センターなど、いくつかの機能を複合的に有する介護保険事業所だ。開始時期は2016年12月。その半年ほど前から構想が持ち上がり、何度かのプロジェクト会議や助成金獲得等を経てスタートした。会議室等のある2階部分を開放し、月1回、第3金曜日の午後5時から7時半に開催されている。料金は大人300円、高校生以上の学生100円、中学生以下の子どもは無料である。名称を子ども食堂とせず、おいでやす食堂とした意味は、子どもを中心に多世代の交流を目的とした居場所づくりを目的としたことから、あえて“子ども”は使われていない。

高齢者福祉施設がその一画を活用し、地域貢献のための事業を行う例は他にもみられる。社会福祉施設を経営する社会福祉法人を会員とし、その経営基盤の強化、福祉施設の機能充実と健全な施設運営を目的として、昭和56年（1981年）に全国社会福祉協議会の内部組織として設立された「全国社会福祉法人経営者協議会」では、行動指針「アクションプラン2020」の中に“地域における公益的な取組の推進”を掲げ、“福祉のまちづくり”“法人資源を活かした地域への働きかけ”“団体地域コミュニティの創造・再生”といった社会貢献事業を推進している。

西院デイの場合、高齢者のより良い支援のため、できることとの1つとしての食堂事業という位置付けで始まった。職員は普段の支援を通し、高齢になっても認知症であってもできることも多くあり、それぞれが持てる力を発揮したいニーズがあることを専門的知見から把握していた。究極の目標には働くことも視野に入る。それを実現するためには、多世代の多様な人たちが集い、互いを理解し、顔の見える関係になる必要がある。つまり、当事者をめぐる環境が整備されねばならないという課題が横たわっていた。認知症高齢者が理解され、力が発揮される社会とは、いわば、社会的弱者の立場にある誰もが理解され、認め合い、許容力の深い社会であるともいえよう。各地の子ども食堂誕生の追い風が足がかりにもなり、おいでやす食堂は、誰もが暮らしやすいまちづくりに向けた1つの試金石として活動を開始した経緯がある。

その意味でおいでやす食堂は、法人資源である高齢者支援の機能や施設という場の提供と、西院デイ周辺地域の子ども達の支援をコラボレーションさせた取り組みである。そこで、食堂に誘う対象者は特に制限せず、誰もが集える居場所とすることは立ち上げ前から施設方針で打ち出された。実際、参加者の年齢層は大変幅広く、乳児から高齢者までが1つのフロアに集っている場面がみられる。

湯浅（2016）によると、子ども食堂の形態は多様で、機能面から見ると、共生食堂とケア付食堂の2タイプが代表的だという（図1）。この中では、おいでやす食堂は地域づくり型（コミュニティ指向）でかつターゲット非限定（ユニバーサル共生型）に合致している。子ども食堂に多世代交流の場という意味があっても不思議ではない⁸。

子ども食堂といえば、子どもの貧困対策として広がった経緯があるため、要支援の子どもに焦点化しないことには議論があった。だが、すそ野を広げ多くの人たちが交わる場とする中で徐々に課題に接近していきけるのではないかという方針のもと、この方式で運営されている。

2. おいでやす食堂の規模

スタートした日に参加した子どもは3名であった。それも身近な人たちが“連れてきてくれた”子どもたちであり、自発的な参加者はいなかった。それが徐々

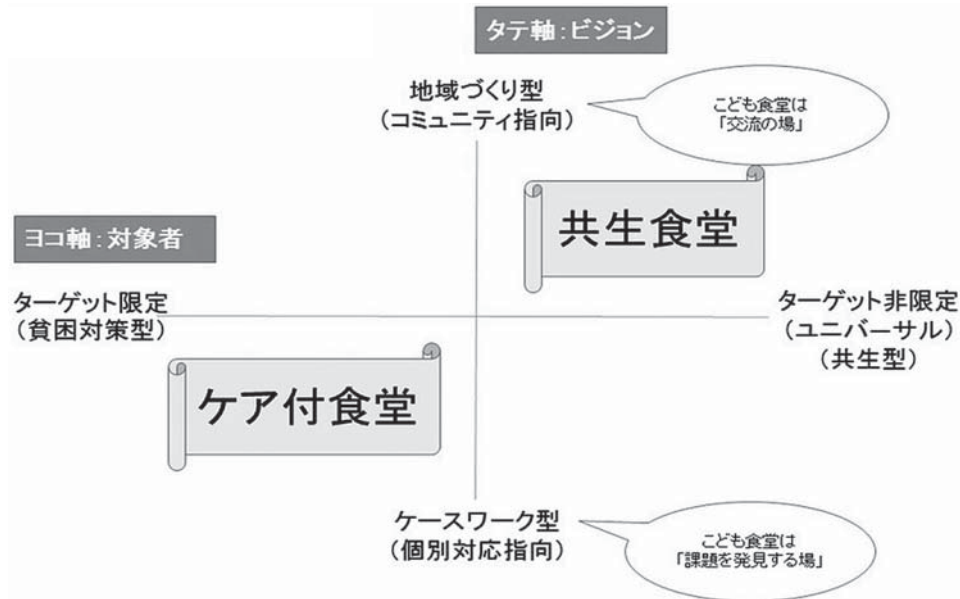


図1 「共生食堂」と「ケア付食堂」
 出典：湯浅誠「「なんとかする」子どもの貧困」p.71 角川新書（2017）より

に人数が増え、現在では100人程度で推移している。そこには、視察目的や食堂に来れば必ず意中の人に会えるから来られる団体、個人も少なからず見られる。プログラムとしては、食事は常にカレーライスを提供し、副菜にはサラダ、おやつにベビーカステラをその場で焼いている。カレーライスは当初は1種類だけであったが、年代に応じて選択できるよう、甘口、辛口の2種とハヤシライスも用意している。レクリエーションプログラムとしては、紙飛行機づくりが得意なボランティアの参加により紙飛行機づくりや折り紙を、最寄りの小学校PTAサークルによるお話の読み聞かせをほぼ毎回、開催している。その他に和太鼓演奏など単発で組まれるときもある。それぞれ、行きたい時に行きたい子どもや保護者が自由参加のプログラムである。おいでやす食堂への高齢者の参加も多いが、高齢者はこうしたプログラムには参加せず、特定の場所に集まり会話を楽しむ様子が見られる。また、子どもが遊んでいる間、子育て中の保護者層も特定の場所に集まり会話を交わしている。こうしてみると、①. 高齢者の人たちのゾーン、②. 子育て中の保護者のゾーン、③. レクリエーションプログラムに参加する親子、子どものゾーンの3つのパターンに分けられる。間取りの制限、一度固定の場所へ落ち着いた後の移動のしにくさも要因かもしれないが、年代間の活発な交流風景というものは見られない。参加者が増えゆく中で、

参加者ニーズに適合するスタイルとして①②③のパターンを生み出している。それぞれ銘々が自由に過ごすことができるのがこの食堂の特徴だ。

3. ネットワーク構築の軌跡

おいでやす食堂がネットワーク拠点として成長を遂げていく端緒はどのように開けていったのだろうか。表1は、開始期から2018年8月までの約2年間に西院デイが接触を持った団体一覧になる。

実のところ、全国の子ども食堂をみれば様々な成り立ちがある。学校も含めた地域の地縁組織を土台に生まれたものもあれば、企業や社会福祉施設が場所提供をスタートしたものもあれば、個人経営のお店の定休日に子ども食堂として開所するものまで個々に異なる⁹⁾。その中で、学校や子育て関係団体と最初から関係する組織が主催する場合、子どもの集客はもちろん望みやすい。だが、そうでない場合は勝手が違う。地域の宝である子どもたちが過ごす場所として学校や保護者に足を運んでもらうには、そこがどのような場であるのかを知ってもらい、何より信頼してもらい必要がある。普段の付き合いがない者が主催者の場合は、そこを一から構築し、距離を埋めていく努力が求められる。西院デイは社会福祉施設とはいえ、介護保険事業を行う高齢者対象の施設である。子ども食堂をバックアップしてくれる関係先は少なく、特に設立前

表1 おいでやす食堂への協力体制の構築

時期	協力先	属性	食堂へのかかわり
2016年9月	セカンドハーベスト京都	団体	食堂設立に関する指導、広報協力、食材の寄贈。
	登録ボランティア	個人	最寄りの地域住民によるボランティアとしての協力。主に調理や広報。
2016年10月	A 大学	団体	学生ボランティアの募集協力。
	近隣地縁団体 B	団体	食堂設立に関する理解、協力。
	デイ近隣住民宅	個人	趣旨に賛同し、チラシの掲示。
	デイ近隣の神社	団体	趣旨に賛同し、チラシの掲示。
	C 小学校	団体	食堂を開始することを認知。学校と距離があることが懸念されチラシ掲示等はなし。
	D 児童館	団体	趣旨に賛同し、チラシ掲示。
	E 保育所	団体	趣旨に賛同し、チラシ掲示。
	F 幼稚園	団体	趣旨に賛同し、チラシ掲示。
	G 学習塾	団体	趣旨に賛同し、チラシ掲示。
	行政（右京区地域力推進室）	団体	助成金申請、広報協力。新聞社への紹介。
	C 小学校 PTA 読み聞かせサークル	団体	絵本の読み聞かせのボランティア。
2016年12月	近隣地縁団体 H	団体	食堂設立に関する理解、協力。
	京都府共同募金会	団体	はあとバースデー事業、ケーキの寄付。
	近隣の農家	個人	食材の寄贈（以降、散発的に寄付いただく）。
2017年1月	近隣地縁団体 I	団体	食堂設立に関する理解、協力。
2017年2月	サンケイリビング新聞社	団体	取材記事掲載、次回開催日時の案内。
	行政（市民新聞）	団体	次回開催日時の案内。
	京都 SKY センター	団体	シニアボランティアの紹介。
2017年8月	行政（京都市市民協働課）	団体	食材提供の連携先の紹介。
	任意団体	団体	太鼓の演奏。
2018年3月	NPO 団体	団体	マッチ箱展の作品制作のワークショップ。
	特技披露ボランティア	個人	ギター演奏のボランティア。
2018年5月	J 大学	団体	西院デイでの研究協力の一環として食堂協力。
2018年7月	K 大学	団体	研究活動の一環として、学生と共に来所。
	L 大学	団体	研究活動の一環として、見学。
	一人親サポートセンター	団体	活動の連携。
2018年8月	他区のデイサービスセンター（認知症の人と家族の会）	団体	見学（認知症の人の働く場としての模索）。
	他区の児童館	団体	子ども食堂を開始するにあたっての視察。
	障害者地域生活支援センター	団体	カフェ等と協力の相談。

(筆者作成)

や設立当初はそのためのアプローチを要した。しかし、継続していくうちに、おいでやす食堂が広報されて、関係先からのアプローチも増えてきた。そうして、食堂を通じた団体、個人のネットワークが徐々に形づくられていく。さながら、おいでやす食堂へ行けば新たな出会いがあり、出会いが新たな活動を生み出す「場」として急速に成長しているかのようだ。

いうまでもなく、ネットワーク構築は地域福祉課題の解決のためには求められるスキルであり、とりわけ

地域包括支援センターのような組織では多種多様な相談業務の対応のためには、ネットワークなしには不可能である。おいでやす食堂を実践することを通じて、もともとこれまでに培っていた高齢者福祉の分野のネットワークに加え、子どもをキーワードにした新たなつながりも融合されて、その結果、重層的で多彩なネットワーク構築へのプロセスを辿っている。

Ⅲ. ネットワークがもたらした実践事例

Ⅱで確認した新たなネットワークは、制度内の介護保険事業をするだけでは生み出せなかった新たな実践を生みだしている。実際、どのような活動をもたらしたのか、本章では具体的事例をみていきたい。なお、倫理的配慮として、事例の本質が損なわれないように留意しつつ、名前が特定されないよう固有名詞は用いず、個人の場合は匿名にしている。

1. 活躍の場として広がり

(1) 施設利用者の活躍の場の広がり

西院デイでは、利用者の自立支援の取り組みの一環として高齢者の「社会参加」に取り組んでおり、施設内で役割を持つ工夫をしている。その1つの取り組みとして、おいでやす食堂の料理の下ごしらえを利用者が行っている。デイサービスの利用者から希望者を募り、毎回5～6人の女性の利用者が参加している。参加者は介護保険の要介護認定を受けており、家では家族が料理を担っていることが多く、包丁を持つ機会が減っている。そのため、初めは戸惑いながらも、長年経験した調理の作業は体が覚えており、すぐ上手に包丁で皮むきをされる場面を見ることができる。デイサービスのプログラムとしての自立支援の取組に終始するのではなく、おいでやす食堂の料理の下ごしらえをすることで、自身の役割や地域とのつながりを感じられる社会参加の機会となっている。

(2) シニア層のボランティアの活躍の場の広がり

西院デイでは、従来よりボランティアコーディネーターを配置している。施設に地域とのチャンネルになれる職員を配置したことによる成果が生まれており、食堂開始前から、一芸披露ボランティアや傾聴ボランティア、コミュニティーカフェの接客ボランティアなど多数の人が様々に活動をしている。そして、その中からおいでやす食堂に参加してくれている人がいる。特に、シニアボランティアは主力して欠かせない存在になっている。その中の一人で、コミュニティーカフェのボランティアをしているMさんは、おいでやす食堂の立ち上げから携わってくれている。その方の提案で、若いママさんや学生さんに裁縫を教えたいという声が上がリ、がまぐち財布を作るワークショップを開

催する回ができた。食堂で食事をするだけでは多世代の交流が生まれにくかったが、ワークショップという共同で作業をする場を設けることで、交流するきっかけとなった。その他、おいでやす食堂オープン後にもシニア世代が集まっている各種団体とのつながりができ、そこからボランティアの紹介があるなど、ボランティア関係団体とのつながりも生まれている。

開設当初、子どもが楽しめる企画を検討しないと決まっていた時に、大学より、同じくシニア世代の折り紙が得意なボランティアの紹介を受けた。凝った仕掛けがされている紙飛行機の作り方や飛ばし方を来場する子どもに教え、一緒につくる活動をしている。このように子どもが楽しみに参加できるきっかけを作ることを考え、定着できたのはこうした特技を持ったボランティア活動から生まれたものである。他にも小学校のPTAサークルである読み聞かせのボランティアについても同様であり、今では定番化しているが、サークルのメンバーが開設から現在に至るまで、試行錯誤して子どもへのアプローチ方法や絵本の読み聞かせが子どもの育ちに対し、より効果的なものとなるよう検討を重ねてきている。食堂の形を作ってきたボランティアの存在はおいでやす食堂発展にあたって、大きな要素となっている。

(3) 参加者の小学生がボランティアとして食堂に参加

活躍しているのは、シニアだけではない。施設の同町内に住む小学生は、毎回、手伝う事を楽しみに来てくれている。おいでやす食堂に来ては、大学生ボランティアと一緒にベビーカステラを作り、参加者みんなに振る舞っている。回数を重ねるごとに、本人の仕事になってきており、マイエプロンを持参したり、少し早くきて準備をしたり、最後の片付けをするようになり、子どもにとっての活躍の場となっている。

(4) 他分野の福祉事業所との繋がりが場を創る

引きこもりで過ごしている人を対象とした就労支援事業所に通所している利用者が子どもや食堂に参加している方と交流する機会をアートを通して持つ事ができた。また、その際には障がいのある利用者が音楽演奏を行い、参加している年配層と歌と音楽を通して、自然に交流することができていた。これは、この食堂のもつ、自由で誰でも受け入れる雰囲気があるため

はないか。その場にいる誰もが満足感を持って交流ができていた事例である。

2. 子ども・ママ友・学生など新しい世代への広がり

高齢者福祉施設「西院」では、以前から貸スペースとして施設のスペースを無料で地域の方に開放している。しかし、高齢者福祉施設であることから、利用者はシニアの団体が多かった。しかし、食堂を開始してからは、ママさんの団体などの集まりの場としての利用が増えた。子供が騒いでも周りの目を気にする必要がなく、ママさんが気兼ねなく集まれる場になっている。高齢者だけでなく、誰もが集える施設として若い世代の方にも認知されるようになってきている。

高齢者福祉施設「西院」では、地域の中にある施設として地域の方が参加できるイベントを開催してきている。デイサービスにおいては、特に食堂を開始してからは、デイサービス主催の夏祭りには、子どもたちが来てくれることを想定したイベント内容に変更し、デイサービス利用者がもてなす側になるように企画をしている。食堂を利用したり、貸スペースを利用してママさんや子どもたちが参加してくれるようになり、食堂以外でも多世代が交流する場となっている。

おいでやす食堂を立ち上げた時から、食堂の企画・運営に京都光華女子大学の学生が参画している。学生ボランティアとしては、それ以外にも、施設の実習に来た学生などもボランティアとして参加しており、他大学の学生同士の交流の場になっている。

3. 専門職への広がり

セーフティーネットとしての役割としては、一人親サポートセンターや地域包括支援センターとの連携を行っている。高齢者福祉施設「西院」には、サテライト施設の「域密着型サービス welcome やまの家(以下、やまの家)」がある。やまの家では、保育施設の完備があり、同学区にあるひとり親家庭の支援事業所とは以前から交流がある。その施設には一人親サポートセンターも併設されている。やまの家の繋がりもあり、おいでやす食堂には、一人親サポートセンターの職員が不定期ではあるが参加し協力してくれている。一人親サポートセンターとの関わりが、少し遠ざかっていた家族があったが、おいでやす食堂に来ているときに職員と再会し、現状を把握することができたという事

例があった。高齢者福祉施設にはない専門性を一人親サポートセンターが担っており、困ったらすぐに相談できるセーフティーネットとしての役割が機能し始めている。

高齢者福祉施設「西院」の事業の1つに、京都市からの委託を受けた地域包括支援センターがある。地域包括支援センターは、高齢者への総合的な生活支援の窓口であり、介護予防ケアマネジメントの業務も行っている。その中には、独居で生活している高齢者もあり、基本的には一人で食事をしている。また、外出することもなく閉じこもりがちになる人もいる。しかし、介護保険サービスの中で社会参加を目的として最も活用が多い通所介護では、介護予防の人は生活機能はまだ高く、なじまない人も多い。また、地域には介護保険サービス以外で気軽に集えるインフォーマルな場所が少ない。そのような人の外出するきっかけとして、食堂が活用されている。食堂を紹介したケアマネジャーの話では、「閉じこもりになりがちの人に食堂を紹介している。いろんな人と同じ空間でご飯を食べる喜びを感じてほしい」という想いで紹介したという。また、車いすを利用している家族と共に来られる三世代家族もあり、高齢者福祉施設の利点であるバリアフリーな環境が、車いすでも来やすい外出場所として活用されている。地域包括支援センターのネットワークにより、高齢者の1つの居場所として利用されている。

また、地域包括支援センターでは、近隣の小学校の総合的な学習の一環として、認知症サポーター養成講座を実施している。食堂に来ている児童も講座を受講することがあり、児童が食堂に来た時に「この前、話をしてくれた人」とスタッフに声をかけてくれることが増えた。講座だけの繋がりだけで終わるのではなく、食堂を拠点に地域の中で出会う機会になっており、大変意味のあるものとなっている。認知症サポーター養成講座と高齢者福祉施設で開催する食堂を通して、高齢者について学び感じる環境が提供できてきている。

4. 地域の子ども食堂との広がり

おいでやす食堂を立ち上げた当初、同小学校区内で、地域団体が主体となって運営する「子ども食堂」を実施する動きがみられた。しかし、運営開始にあたって、人員の確保や食材の調達、資金確保などの整備に苦慮されており、なかなか具体化しない実態があった。そ

ここで、社会福祉法人として、公益事業についての予算化があり、コミュニティーカフェなどの食事提供のノウハウを有している高齢者福祉施設で先行的に実施したことから、その地域団体との情報交換をする機会を持ち、同学区内で2つの子ども食堂を運営することにつながった。その後も助成金の情報やボランティアの紹介をするなど、様々なことで連携を行っている。同学区内に2つの子ども食堂があることにより、この地域の子どもをはじめとする様々な地域住民にとって、参加できる「場」が複数生まれ、そこで人との交流や地域役員、専門職からのアドバイスなどを受ける事ができ、安心・安全に生活できることに繋がるのではないかと考える。また、開催日時が違うことにより、こういった場を求めている人にとって、自身の都合がつく日時に参加できることとなり、「場」への参加の機会が確保されることに繋がるのである。

さらに、山ノ内学区にある児童館が基幹となって実施する「子育て支援ネットワーク会議」において、この学区に子ども食堂を立ち上げようということとなり、2017年12月より「つながり食堂」の運営が開始された。この食堂の運営理念も子どもを中心とした多世代が参加できる「場」づくりである。山ノ内学区と西院学区は、近隣の学区である。おいでやす食堂には、山ノ内学区の参加者もあり、ひとり親家庭の支援事業所との関わりも同様にある。このことから近隣地域にある子ども食堂として連携があり、互いの情報交換はもちろんのこと、子どもをはじめとする地域住民の集いの「場」が確保されることに繋がっている。

5. 多様な人の交差点としての広がり

多くの方が食堂に関心を持ち、見学などの形で訪れている。地域団体、地縁団体、企業、行政、大学教員、福祉施設、今後子ども食堂をしたい人など、ジャンルを超えた多くの方が見学に来られている。見学に来た人や団体同士の出会う場にもなっており、名刺交換が盛んにおこなわれている場面がみられる。多様な人の交差点となり、次への広がりのきっかけとなっている。

IV. ネットワーク構築に至る要因分析

おいでやす食堂がどのようにネットワーク拠点へと育ちつつある理由は何なのであろうか。本章では、そ

の要因を整理するため、設立期から関わりを持ち、これまでの変遷をみてきた関係者7名が集まり、その要因分析を試みた。

1. 研究方法

(1) 調査対象と方法

本研究では、おいでやす食堂にスタート時から参加しているボランティアスタッフ、職員7名により、ネットワーク構築に繋がった要因とは何かを出し合い、それらを対象としてKJ法(川喜多1986)での分析を行った。意見はKJラベルに転記し(79枚)、多段ピックアップによって厳選したラベル(42枚)を元ラベルとして、狭義のKJ法を実施した。図2は元ラベルからのグループ編成のプロセスが全て把握できる省略のない図解である。

グループ編成の結果、ラベル群は最終的に、8つのカテゴリーに分類された。【施設の持つ力】【来る者拒まず】の姿勢、【“子ども食堂”が放つ力】【魅力を感じるメニュー】【時間帯の設定・夜間営業】といった条件が相互作用の中で育まれることで、【つながりが生み出す居心地の良さ】や【地域ぐるみの育み】力、【施設利用者の活躍の可能性】も生み出して、場としての成長に繋がっていることが見いだせた。

なお、倫理的配慮としては、この7名の間で研究目的を共有したうえで、論文化するなど広く発信していくことの了解を得た。また、ラベル内の表現は、個人が特定できないようすべて匿名化している。

【施設の持つ力】

おいでやす食堂には、『もともとあるものからのつながり』がある。地域に根を下ろしていた「福祉施設で行われるということで、信用が置きやすい」。「高齢者福祉施設「西院」に地域包括支援センターを併設しているので、そこからの紹介があり、安心感がある。」「高齢者福祉施設『西院』の施設の1つ「やまの家」で子育てサロンをしている繋がりがあるので、ママの参加がある。」というのは、デイサービスセンター、地域包括支援センター、小規模多機能型居宅介護を運営しており、高齢者支援のつながりのみならず、小規模多機能型居宅介護での「子育てサロン」のおかげで子育て世代にも既につながりを持っていた。

さらに、『交通の便や自転車置き場など立地の面で

ネットワークの広がりを生み出す要因とは？

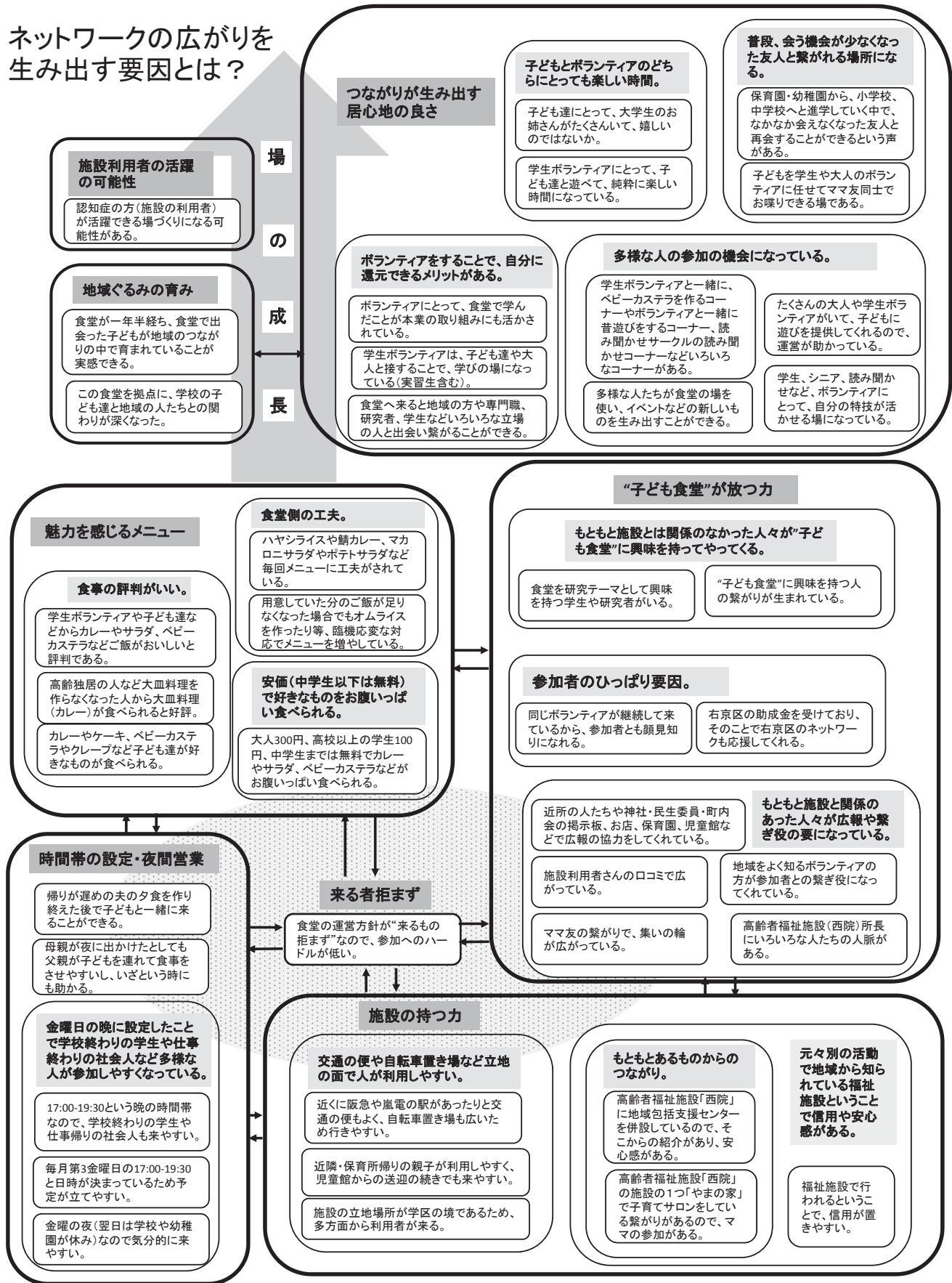


図2 ネットワークの広がりを生み出す要因

- 1) 2019.8.2
- 2) 京都市西院老人デイサービスセンター
- 3) ネットワークの広がりを生み出す要因とは
- 4) 食堂関係者7名

人が利用しやすい。』「近くに阪急や嵐電の駅があったりと交通の便もよく、自転車置き場も広いため行きやすい。」ということや、「近隣・保育所帰りの親子が利用しやすく、児童館からの送迎の続きでも来やすい。」「施設の立地場所が学区の境であるため、多方面から利用者が来る。」というように、中京区・右京区の境にあるためどちらの区からも行きやすい立地条件も活かした。

【時間帯の設定・夜間営業】

「17:00-19:30 という晩の時間帯なので、学校終わりの学生や仕事帰りの社会人も来やすい。」「毎月第3金曜日の17:00-19:30と日時が決まっているため予定が立てやすい。」「金曜の夜（翌日は学校や幼稚園が休み）なので気分的に来やすい。」ということで、『金曜日の晩に設定したことで学校終わりの学生や仕事終わりの社会人など多様な人が参加しやすくなっている。』。「母親が夜に出かけたとしても父親が子どもを連れて食事をさせやすいし、いざという時にも助かる。」や「帰りが遅めの夫の夕食を作り終えた後で子どもと一緒に来ることができる。」のメリットも挙げられた。

【“子ども食堂”が放つ力】

『もともと施設と関係のあった人々が広報や繋ぎ役の要になっている。』では、「高齢者福祉施設「西院」所長にいろいろな人たちの人脈がある。」「地域をよく知るボランティアの方が参加者との繋ぎ役になってくれている。」「近所の人たちや神社・民生委員・町内会の掲示板、お店、保育園、児童館などで広報の協力をしてきている。」「施設利用者さんの口コミで広がっている。」「ママ友の繋がりで、集いの輪が広がっている。」というように、もともと施設が有していたアドバンテージをフル活用し、つながりを生み出している。また、「同じボランティアが継続して来ているから、参加者とも顔見知りになれる。」「右京区の助成金を受けており、そのことで右京区のネットワークも応援してくれる。」も『参加者のひっぱり要因。』になっている。さらに、「“子ども食堂”に興味を持つ人の繋がりが生まれている。」「食堂を研究テーマとして興味を持つ学生や研究者がいる。」というように『もともと施設とは関係のなかった人々が“子ども食堂”に興味を持ってやってくる。』のも理由として考えられる。子ども食堂の言葉が放つ力の大きさを表している。

【来る者拒まず】

「食堂の運営方針が“来るもの拒まず”なので、参加へのハードルが低い。」という主催者が決めた方針のいい意味での緩さが多様性を受け入れる土壌となっている。

【魅力を感じるメニュー】

「学生ボランティアや子ども達などからカレーやサラダ、ベビーカステラなどご飯がおいしいと評判である。」「高齢独居の人など大皿料理を作らなくなった人から大皿料理（カレー）が食べられると好評。」「カレーやケーキ、ベビーカステラやクレープなど子ども達が好きなものが食べられる。」のように、まずは『食事の評判がいい』ことは大きい。「用意していた分のご飯が足りなくなった場合でもオムライスを作ったり等、臨機応変な対応でメニューを増やしている。」「ハヤシライスや鯖カレー、マカロニサラダやポテトサラダなど毎回メニューに工夫がされている。」という『食堂側の工夫』も見逃せない。「大人300円、高校以上の学生100円、中学生までは無料でカレーやサラダ、ベビーカステラなどがお腹いっぱい食べられる。」というように、『安価（中学生以下は無料）で好きなものをお腹いっぱい食べられる。』は、参加者にとっての魅力あるメリットになっている。

【つながりが生み出す居心地の良さ】

「学生ボランティアと一緒に、ベビーカステラを作るコーナーやボランティアと一緒に昔遊びをするコーナー、読み聞かせサークルの読み聞かせコーナーなどいろいろなコーナーがある。」「たくさんの大人や学生ボランティアがいて、子どもに遊びを提供してくれるので、運営が助かっている。」「多様な人たちが食堂の場を使い、イベントなどの新しいものを生み出すことができる。」「学生ボランティアと一緒に、ベビーカステラを作るコーナーやボランティアと一緒に昔遊びをするコーナー、読み聞かせサークルの読み聞かせコーナーなどいろいろなコーナーがある。」というように『多様な人の参加の機会になっている』ことや、「食堂へ来ると地域の方や専門職、研究者、学生などいろいろな立場の人と出会い繋がることができる。」「学生ボランティアは、子ども達や大人と接することで、学びの場になっている（実習生含む）。」「ボランティアにとって、食堂で学んだことが本業の取り組みにも活かされている。」というように『ボランティアをすることで、自分に還元できるメリットがある。』と感じて

もらえていること、「子どもを学生や大人のボランティアに任せてママ友同士でお喋りできる場である。」「保育園・幼稚園から、小学校、中学校へと進学していく中で、なかなか会えなくなった友人と再会することができるという声がある。」というように『普段、会う機会が少なくなった友人と繋がれる場所になる。』機能も生まれており、「学生ボランティアにとって、子ども達と遊べて、純粋に楽しい時間になっている。」「子ども達にとって、大学生のお姉さんがたくさんいて、嬉しいのではないか。」が『子どもとボランティアのどちらにとっても楽しい時間。』を創っている。その結果、ここに集う誰にとっても居心地の良い空間になっている。

【地域ぐるみの育み】

「食堂が一年半経ち、食堂で出会った子どもが地域のつながりの中で育まれていることが実感できる。」「この食堂を拠点に、学校の子供達と地域の人たちとの関わりが深くなった。」ということから、地域の人たちが会えるチャンネルの1つとして定着してきた様子が見える。

【施設利用者の活躍の可能性】

Ⅲでも実践事例として紹介をした「認知症の方（施設の利用者）が活躍できる場づくりになる可能性がある。」が挙げられる。

V. 考察

おいでやす食堂を開設してから、多種多様なネットワークの広がりが感じられると同時にこの社会において、子ども食堂への関心が高いことが改めて分かった。そして、その関心を持つのが、様々な立場の人や機関であることから、実は潜んでいた“子どもを中心に置きながら、誰もが暮らしやすい地域を作りたい”という気持ちを掘り起こすパワーがあると示されたように感じる。換言すれば、地域で共生して暮らす場づくりに、きっかけさえあれば協力しようとする人は多いのではないだろうか。

また、実践事例から見えることは、誰もが誰かの役に立ちたいと思っている事、それは、個人レベルであったり、自分達の暮らす地域をより良くしようと考える地域レベルのものであったりと規模の違いはあれども、目指しているものは同じである。そして、ネッ

トワークの中に専門機関があることで、この食堂が様々な人のセーフティーネットの役割となっていることが少しではあるが見えたことである。

さらには、ボランティアスタッフや職員でKJ法を用いた調査を実施したことにより、そこから得た内容から見て、この食堂が持つ力が整理され、食堂の持つ役割が見えてきたことが大きい。また、実践事例に挙げた内容が少なくとも調査に参加した参加者も同様の体験をし、そこから感じるものがあつたという内容が出ており、施設として考える、この食堂が持っている力やあり方について、裏づけがなされるものとなっている。

この様に、この食堂は様々な角度から要因分析できる場として育ってきていることが分かる。この食堂を語るとき、対象者に応じて、食堂の活用について話すことができ、その人にとっての価値をこの食堂に見出せるものであると考える。それは、やはり、「来る者拒まず」の精神がこの食堂運営の基礎となっている事が大きい。多世代が交流しているということもあるが、単なる年齢差ということではなく、多様な目的を持って参加したいという人を受け入れていることである。事例に挙がっている、誰かの役にたきたい、自身の持っているものを活かしたいというボランティア活動であったり、美味しいものを食べながら誰かと食事をしたい、話したい、という目的で集いの場を求めている人であったり、こういった取組を知りたい、学びたいという目的であったりと様々である。こういった目的を持つ人達が互いに作用しあい、タイミングよくマッチングし、新たなネットワークを生み出しているのではないかと考えられる。運営側は、この食堂に参加する人がそれぞれのより良い方法で活用できるようにすることを知らず知らず支援してきたのである。それはただ単に誰にとっても居心地の良い空間であり、居場所となるものにしたという単純な思いであるところもあるが、それが功を奏しているところがあり、今回の調査で得た内容を踏まえ、意識的に取り組むことでこの食堂を現在の形で存続させていく必要がある。

もうひとつ、見えてきたことは、施設が元々行っている地域に向けた公益事業を含め、この食堂を継続していることがこの食堂のネットワーク構築や広がり大きくしていることである。KJ法の調査を実施した際にもこの話題は出ており、取組を続けているこ

とにより生まれる人と人の関係性の構築が、参加者を含めた地域住民の安心感に繋がっており、そういったことを感じ、体験するエピソードが挙がっていた。具体的には、幼児の頃に知り合った子どもが小学生になった際にボランティアのことを覚えており、学校で声を掛けてくれたというのである。このように、この食堂の場を通して、地域に顔見知りの大人を増やすことで小学生にとっては、安心してこの地域で過ごせることができるのではないかと考える。このエピソードは子どもとボランティアの関係であるが、他の年代においてもこの食堂で月1回でも顔を合わせることで他の場所や場面で出会うことができ、知り合いがいるという感覚で安心感を得られるのではないかと考える。これは、取組を継続してきたから起こることであり、この食堂が常にその場にあり、いつ来ても変わらない対応で存在していることが大きいと感じる。

食堂の開催時には、一見すると親子と高齢者の交わりがなく、本当の意味で多世代交流の場となっているのか疑問視されるところがあるが、その場で大きな交わりがなくても、自然と顔見知りになったり、食事を取りに行く場面などで同じ空間で、見たり聞いたりする中でその年代ごとにもっている特性を感じているのではないかと考える。例えば、高齢者や障がいのある方にどのような不自由さがあり、なにが出来て、何に困っているのかなどを若い世代の人が自然な形で見聞きしているのではないかと考える。そして、現代においての子どものあり方や子育てについて、高齢期の世代の人が知る機会にもなっているのではないかと考える。それを知る事で自身には関係ないと感じていたことに関心を寄せ、自分ごととして受けとめることに繋がっているかもしれない。これは希望的憶測に過ぎないが、この後、この食堂を継続していく上で食堂として、施設として重要な役割となるのではないかと考える。

今回、ボランティアスタッフとのKJ法のワークの中で出てきた内容を聞くと、ボランティアスタッフが参加者をよく観察し、話しかけていることが良く分かった。参加者が発していた食堂に対する思いや先ほど挙げたようなエピソードがあったり、新たな発見についての話に及び、ボランティアスタッフの考えまで変化することに繋がる話など、運営側が得られない話が多く聞かれた。例として挙げるのであれば、子どもや高齢者に意識がいきがちであるが、子どもの親世代

にも関心を向ける必要があるということである。食堂では、親同士の交流が盛んである。食堂スタッフが子どもを見てくれるという安心感もあり、ゆっくりと話をする機会となっている様子である。こういった場が必要としているだけの何らかのストレスを抱えているのであろうと推測される。こういった話を聞き、子育てを経験した食堂スタッフや専門職がそっと相談に乗ることも検討していかなければいけないと感じた。

このように、参加者の話や様子を見聞きする余裕を運営側は持っていないのが現状である。毎月の運営に追われ、当日もその日の運営に追われている状態である。参加者の一人ひとりを見て、その輪の中に入り、話を聞く機会を持つことができているのである。もし、それが難しくても、ボランティアスタッフが参加者の声に耳を傾け、様々な声を拾っているのであれば、それを運営者が聞き取ることをしなくてはならない。それができなくては、いくらネットワークが広がっていても、専門機関とつながりができていてもそれを活かすことができないのである。ネットワークの構築ができてきていることだけに満足してしまうようなことにならないためにも、食堂に関わっている方への聞き取りやアンケートなど、何らかの取組を検討することが喫緊の課題である。

こういった課題を抱えつつも食堂を継続してくる中でネットワークの構築が成されて行き、様々な気づきを得ることができた。先にも述べたように、この食堂の特徴である誰をも受け入れる姿勢を基に地域で世代を超えて互いに知り合い、地域の中で意識し合える関係を作っていける場に、地域ぐるみで子どもの育みや助け合う気持ちを持って、「地域共生社会」につなげていく、それがこの食堂の役割ではないかと考える。そのためにも、今後も末長く食堂運営を継続していく必要がある。

注)

- 1 高齢者福祉施設「西院」所長。
- 2 高齢者福祉施設「西院」作業療法士。
- 3 朝日新聞「広がる子ども食堂2286か所-交流・見守りの場に 自治体も補助」2018年4月4日朝刊
- 4 湯浅誠「こども食堂2,200か所を超える 2年で7

- 倍以上 利用する子どもは年間延べ100万人超」
(<https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20180403-00082530/>) 20180819 取得
- 5 湯浅誠 (2018) 『「なんとかする」子どもの貧困』 pp68、角川新書
- 6 NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク編著 (2016) 『子ども食堂をつくろう！一人がつながる地域の居場所づくりー』 pp116-117、明石書店
- 7 南多恵子、河本歩美、寺本珠真美 (2017) 地域共生を目指す居場所づくりに関する研究～京都市西院老人デイサービスセンター「おいでやす食堂」の軌跡から～』『京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要第55号』 pp157-173、京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部
- 8 湯浅誠 (2016) 「「こども食堂」の混乱、誤解、戸惑いを整理し、今後の展望を開く」(<https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20161016-00063123/>) 20170830 取得
- 9 京都新聞「未来を育むこども食堂の今 湯浅誠が歩く上～下」2018年8月17～19日朝刊

引用参考文献

- 朝日新聞「広がる子ども食堂 2286 か所-交流・見守りの場に 自治体も補助」2018年4月4日朝刊
- 飯沼直樹 (2018) 「地域で愛される子ども食堂 つくり方・続け方」翔泳社
- NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク編著 (2016) 『子ども食堂をつくろう！一人がつながる地域の居場所づくりー』 明石書店
- 川喜多二郎 (1986) 『KJ 法-混沌をして語らしめる』 中央公論新社
- 京都新聞「未来を育むこども食堂の今 湯浅誠が歩く上～下」2018年8月17～19日朝刊豊島子ども
- 空閑浩人編著 (2015) 『ソーシャルワーク』、ミネルヴァ書房
- 厚生労働省「「地域共生社会」の実現に向けて」(<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000184346.html>) 20180919 取得
- 滋賀県社会福祉協議会 (2018) 『遊べる・学べる淡海子ども食堂ガイドブック (入門編)』

- WAKUWAKU ネットワーク (編) (2016) 『子ども食堂をつくろう！～人とつながる地域の居場所づくり』、明石書店
- 妻鹿ふみ子編著 (2010) 「地域福祉の今を学ぶー理論・実践・スキルー」ミネルヴァ書房
- 長田英史 (2016) 「場づくりの教科書」芸術新聞社
- 湯浅誠 (2016) 「「こども食堂」の混乱、誤解、戸惑いを整理し、今後の展望を開く」(<https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20161016-00063123/>) 20170830 取得
- 湯浅誠 (2017) 「こども食堂は第2ステージへ 地域性の獲得に向けて」(<https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20170708-00073025/>) 20170902 取得
- 湯浅誠 (2017) 『「なんとかする」子どもの貧困』、角川書店

追記

本稿の執筆に際し、「おいでやす食堂」を利用されている皆様、食堂を支えておられる地域の皆様、ボランティアとして参加している京都光華女子大学学生スタッフ、高齢者福祉施設「西院」の皆様に心から感謝申し上げます。